

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅医療の支援手段を広く知らせる取り組み「遠隔医療従事者研修事業」の研修プログラム開発報告
演者名	長谷川高志 1)3)、酒巻哲夫 2)
所属	1)群馬大学医学部附属病院、2)高崎市医師会看護専門学校、3)日本遠隔医療協会

目的

厚生労働省は平成 26 年度より遠隔医療推進策として、遠隔医療従事者研修事業を開始した。特定非営利活動法人日本遠隔医療協会がこれに応募して、実施者に採択された。対象は在宅医療や慢性疾患診療向けで、医療介護関係者や行政者を対象に行う。平成 26 年 11 月半ばに東京、11 月末に大阪で、各 3 日間の研修を実施すべく準備を進めている。本稿では研修プログラム開発の結果を報告する。

実践内容

遠隔医療の基礎的知識は社会に普及していない。制度、技術、臨床と広範な講義が必要である。3 日間の各半日を入門、地域医療・災害医療、基礎（技術）、基礎（制度、研究）、在宅医療（テレビ電話診療）、慢性疾患診療（モニタリング）の 6 コースに分け、座学 19、実習 4、討議 7 の合計 30 科目を設けた。特に在宅医療と慢性疾患管理では、遠隔医療機器を用いた実習を行う。入門コースで厚生労働省より地域包括ケアの講義を行う。講師は実践的研究者や現場専門家多数を配して、職種別では医療 14 名、理工学 4 名、一般 2 名の合計 20 名となり、講師所属施設別では、病院等 6 名、大学等 8 名、行政関係 4 名、企業 2 名である。

実践効果

4 ヶ月の短い準備期間で、カリキュラムを新規開発し、多様な専門家から日程調整可能な講師を集めることには困難を極めた。多くの遠隔医療研究者、実践者と丁寧に研修目的や内容を議論して講義を開発することは、日本の遠隔医療として初の試みだった。機器の技術講演に陥りがちな従来研修と一線を画して、医療者のための研修プログラムを開発できた。

考察

遠隔医療を単なる技術デモンストレーションではなく、地域包括ケアの時代の実践的手法と示せると考えられる。各講師と深く討議した結果が、短期でのカリキュラム編成の成功につながったと考える。受講者も初の試みへの意欲を持って集まりつつある。両者の意識が互いに通じるか、研修実践の結果より評価したい。